

第2回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム
「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」全記録（Ⅰ）
〈開会の挨拶と趣旨説明〉

主催 愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）
共催 中日新聞社
後援 公益財団法人愛知大学教育研究支援財団、愛知大学同窓会
日時 2024年7月6日（土）13:00～17:00
会場 愛知大学名古屋キャンパス 本館20階大会議室
オンライン配信：ZOOMビデオウェビナー
使用言語 日本語

プログラム

第一部 開会式と講演の部（総合司会 田中英式）

開会の挨拶 広瀬裕樹（愛知大学理事長・学長）
趣旨説明 李春利（愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）所長）
衛娣（周南公立大学講師・ICCS客員研究員）

記念講演 國分良成（慶応義塾大学名誉教授、前防衛大学校長）
演題「歴史的視点から見た日米中関係の現在—ヴォーゲル先生に敬意を込めて—」

基調講演 リチャード・ダイク（ハーバード大学アジアセンター顧問）
演題「半導体産業をめぐる米中日競争のフロンティア」

第二部 パネルディスカッション

テーマ： 「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」
パネリスト：國分良成（慶応義塾大学名誉教授、前防衛大学校長）
リチャード・ダイク（ハーバード大学アジアセンター顧問）
李廷江（清華大学日本研究センター所長、中央大学教授）
江藤名保子（学習院大学教授）

モデレーター：李春利（ICCS所長）

- ・一般討論&質疑応答
- ・総括 佐藤元彦（愛知大学大学院長）
- ・閉会の挨拶 鈴木孝昌（中日新聞社取締役・名古屋本社代表）



ICCS 国際中国学研究センター
International Center for Chinese Studies

第2回 エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム
アジア研究の過去・現在・未来 (そのII)

開催日/2024 **7.6** (土) 参加無料
要申込
日本語講演

『Japan as No.1』の著者
Ezra・F・Vogel/傅高義
故 **エズラ・ヴォーゲル** 氏
ハーバード大学 名誉教授

時間/ 13時00分~17時00分 受付開始/ 12時30分
会場/ 愛知大学名古屋キャンパス 本館20階大会議室
オンライン配信/ Zoomビデオウェビナー

主催/ 愛知大学国際中国学研究センター (ICCS)
共催/ 中日新聞社
後援/ 公益財団法人愛知大学教育研究支援財団、愛知大学同窓会

プログラム

◆第一部 開会式と講演の部 (13:00~14:25) 総合司会 田中英式 (愛知大学教授)
・開会の挨拶 広瀬裕樹 (愛知大学理事長・学長)
・趣旨説明 李春利 (愛知大学国際中国学研究センター所長)

*記念講演: **國分良成** (慶応義塾大学名誉教授、前防衛大学校長)
演題: 「歴史的視点から見た日米中関係の現在
—ヴォーゲル先生に敬意を込めて—」

*基調講演: **リチャード・ダイク** (ハーバード大学アジアセンター顧問)
演題: 「半導体産業をめぐる米中日競争のフロンティア」

休憩: 15分

◆第二部 パネルディスカッション (14:40~17:00)
テーマ: 「アジア研究の過去・現在・未来 (そのII)」
パネリスト: 國分良成 (慶応義塾大学名誉教授、前防衛大学校長)
リチャード・ダイク (ハーバード大学アジアセンター顧問)
李廷江 (清華大学日本研究センター所長、中央大学教授)
江藤名保子 (学習院大学教授)

モデレーター: 李春利
・冒頭発言 李廷江/江藤名保子/國分良成/リチャード・ダイク
・一般討論&質疑応答
・総括 佐藤元彦 (愛知大学教授)
・閉会の挨拶 鈴木孝昌 (中日新聞社取締役名古屋本社代表)

<お問い合わせ> 愛知大学国際中国学研究センター(ICCS)事務室
〒453-8777 愛知県名古屋市中村区平池町4-60-6 TEL:052-564-6120
URL:<https://iccs.aichi-u.ac.jp> Email:iccs-event@m1.aichi-u.ac.jp



登壇者プロフィール



國分良成(Ryosei Kokubun)

慶應義塾大学大学院修了後、同大学助教授・教授、東アジア研究所長、法学部長、その後防衛大学校長を歴任。法学博士。専門は中国・東アジア論。日本国際政治学会理事長、アジア政経学会理事長、ハーバード大学、ミシガン大学、復旦大学、北京大学、台湾大学、スタンフォード大学の客員研究員歴任。現在は日本防衛学会会長、アジア調査会会長。主要著書に『防衛大学校』（中央公論新社）、『中国政治からみた日中関係』（岩波書店、椋山純三賞）、『現代中国の政治と官僚制』（慶應義塾大学出版会、サントリー学芸賞）、『アジア時代の検証 中国の視点から』（朝日選書、アジア太平洋賞特別賞）。



リチャード・ダイク(Richard Dyck)

ハーバード大学アジアセンター顧問、ハーバード大学にてMA及びPh.Dを取得、故エズラ・ヴォーゲル教授に師事、故ヴォーゲル教授最後の著書『日中関係史』（第7章）の共著者。半導体検査を専門とする企業TGC-Japan株式会社のオーナー兼代表取締役、プライベート・エクイティ投資会社である日本産業パートナーズ株式会社取締役。日本貿易振興機構(JETRO)、笹川平和財団、日米友好基金の理事を歴任。1999年に内閣総理大臣より国際貿易への貢献により表彰を受ける。現在、石橋湛山元首相の政治思想に関する研究書を執筆中。



李廷江(Tingjiang Li)

清華大学日本研究センター所長、中央大学法学部教授、財団法人日中イノベーションセンター理事長代行。専門は近現代中国政治外交、近現代日中関係史、東アジア国際関係。

清華大学卒業後、中国社会科学院世界政治研究所・日本研究所を経て、東京大学大学院にて衛藤瀧吉教授・平野健一郎教授に師事、学術博士号を取得。亜細亜大学国際関係学部教授、ハーバード大学ライシヤワー日本研究所、同アジアセンター客員研究員を歴任。著書に、『日本財界と近代中国』（御茶の水書房）、『近衛篤磨と近代中国』（原書房）、『日本財界と辛亥革命』（中国社会科学出版社）など多数。孫中山記念会堀川哲男記念賞受賞、日本政治学研究金賞等。



江藤名保子(Naoko Eto)

学習院大学法学部教授。公益財団法人国際文化会館・地経学研究所上席研究員兼中国グループ長。専門は現代中国政治、東アジア国際政治、日中関係。JETROアジア経済研究所副主任研究員、シンガポール国立大学東アジア研究所客員研究員、北京大学国際関係学院客員研究員を歴任。

スタンフォード大学大学院国際政治研究科にて修士号、慶應義塾大学法学研究科にて博士(法学)を取得。著書に、『日中関係史1972-2012 I 政治篇』（東京大学出版会）、『現代中国政治研究ハンドブック』（慶應義塾大学出版会）、『中国ナショナリズムのなかの日本:「愛国主義」の変容と歴史認識問題』（勁草書房）など多数。



鈴木孝昌(Takayoshi Suzuki)

中日新聞社取締役名古屋本社代表。早稲田大学第一文学部卒。1985年中日新聞入社、経済部記者としてトヨタなどの自動車産業を取材。社会部記者として東日本大震災、太平洋戦争史等を取材。96年から2009年に香港、北京特派員を計3回務め、香港返還や鄧小平死去、アジア通貨危機、SARS大流行、北京五輪、四川大地震などを取材した。香港支局長、中国総局長(北京)、経済部長、編集局長を経て2021年取締役電子電波担当、2024年3月から現職。著書に『胡錦濤の対日政策』（日本橋報社）、『現代中国の禁書』（講談社）がある。

第一部 開会式と講演の部

田中英式（愛知大学経営学部教授、総合司会）

皆さま、本日は休日にもかかわらず多数お集まりいただき誠にありがとうございます。では、愛知大学国際中国学研究センター（ICCS）主催の第2回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラムを開催いたします。本日のフォーラムは、昨年度の第1回に引き続きまして、中日新聞社さまに共催のご協力をいただいております。また、愛知大学教育研究支援財団さま、並びに愛知大学同窓会さまにご後援をいただいております。この場をお借りしまして、ご支援・ご高配に厚く御礼申し上げます。申し遅れましたが、私は本日の司会進行を担当させていただきます、本学経営学部の田中と申します。よろしくお願いいたします。

それでは、開会に当たりまして、本学理事長・学長の広瀬裕樹先生より開会のごあいさつを賜ります。広瀬先生、よろしくお願いいたします。

第2回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム 開会の挨拶

広瀬裕樹（愛知大学理事長・学長）



ただいまご紹介にあずかりました学長の広瀬でございます。本日は大変お暑いところ、第2回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」にお越しいいただき、誠にありがとうございます。おかげさまで、会場も満員のうえにオンラインでもほぼ満員という状況でございます。この注目度の高さに非常に感激をしているところでございます。

そして、本日のフォーラムの開催に至りまして、まずご講演いただきます國分先生、リチャード・ダイク先生、そして後半のパネリストとしてご参加いただきます李廷江先生、

江藤先生、そして鈴木さまには大変お忙しいところ、本フォーラムにご参加くださいまして誠にありがとうございます。学長として、心より御礼を申し上げたいと思います。

また、このフォーラムの企画に当たっては、ICCS・国際中国学研究センターの皆さまにはご準備に大変ご尽力いただきました。改めまして厚く御礼を申し上げたいというふうに思います。おかげさまで、大変充実したプログラムになっているかと思えます。私自身も一聴衆として大変楽しみにしております。

ところで、最近の日本は今年一番と言っているような暑さに覆われているところがございます。さきほど気象庁の発表を確認しましたところ、ここ名古屋も気温が35度を超えたということにして、全国でもトップクラスの暑い地域となっております。本日のフォーラムでは、ぜひこの外気温に負けないような、熱い議論、熱い講演が交わされることを期待しておりますが、ただ、くれぐれも「熱中症」にはお気を付けいただければというふうに思います。後半の司会をご担当いただきます李春利先生にも、ヒートアップしそうなところ、ぜひともクールダウンにと、気を付けていただければと思います。本日はどうかよろしくお願いいたします。

田中：広瀬先生、どうもありがとうございました。続きまして、愛知大学国際中国学研究センター所長の李春利先生、並びに、周南公立大学の衛娣先生より、本日のフォーラムの趣旨についてお話しいただきます。なお、衛先生は今年の3月までICCS 研究員として本フォーラムの企画・運営に携わってこられました。では、李先生、衛先生、よろしくお願いいたします。

第2回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム 「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」趣旨説明

李春利（愛知大学国際中国学研究センター所長）
衛 娣（周南公立大学講師・ICCS 客員研究員）

李春利（愛知大学経済学部教授・ICCS 所長）

ただいまご紹介にあずかりました愛知大学国際中国学研究センターの李春利と申します。今日は暑い中、大勢の皆さまにご来場いただき本当にありがとうございます。今日は事務局の集計によりますと、会場参加はとっくに締め切っておりますが、50名を超過しました。また、オンライン参加も今日の午前中の集計ですと465名となります。すなわち、申し込みベースでいえば、会場プラスオンラインで520名を超えているということで、皆さんから多大なご関心を寄せていただいていることに対し、ICCS を代表して心から厚く御礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

昨年に引き続き、今年のエズラ・ヴォーゲル記念フォーラムは第2回目となります。昨年の第1回目も皆さまのおかげさまをもちまして、同じぐらいの規模の520～530名の申し込みをいただき、盛大に開催できました。2回目もこういう形で開催することができま

して、主催者の一人としてはとてもうれしく思っているところです。

また、今年も、中日新聞社さまの共催をいただき、これまで4～5年間継続いただいております。大変お世話になっております。また、愛知大学教育研究支援財団さまからの助成、愛知大学同窓会さまからの多大なご支援もいただきまして、併せて心から深く感謝申し上げます。

私が用意しました趣旨説明をご覧いただきながらお聞きいただければと思います。

まず、共催者の中日新聞さまには今年の1月19日付けの『中日新聞』の紙面をお借りして、エズラ・ヴォーゲル先生の蔵書が愛知大学に寄贈された経緯や、ヴォーゲル先生が4年前に愛知大学に講演に来られた時の話、それから蔵書の中身について寄稿させていただきましたので、ご参考いただければと思います。その次のページは、昨年7月1日に開催された第1回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」のポスターです。

特集発行：「第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム全記録」

本日の私の話は、この1年間、私たちは主になにをやってきたのか、その流れについて簡単にご紹介したいと思います。次の写真は、昨年1回目のエズラ・ヴォーゲル記念フォーラムの状況で、会場は違いますが、パネルディスカッション時の風景です。そして、私たちのこの1年間の仕事の成果になりますが、ICCS 機関誌である『ICCS 現代中国学ジャーナル』（電子定期刊行物、第17巻第1号）に、第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム「アジア研究の過去・現在・未来」と題した特集を組みました。



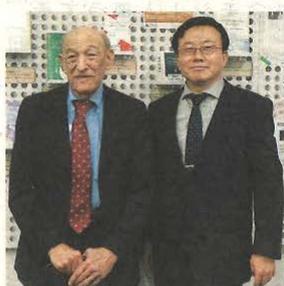
エズラ・ボーゲル文庫創設へ

寄稿 李春利・愛知大教授

東アジア研究 知の拠点に

日本でベストセラーとなった『ジャパン・アズ・ナンバワ』(1979年)の著者で、東アジア研究の世界的な権威として知られる米ハーバード大名誉教授エズラ・ボーゲル先生(1930~2020年)。その蔵書約3100冊が、私が勤める愛知大に寄贈された。文庫「エズラ・ボーゲル・コレクション」(仮称)を創設し、年内にも名古屋市の同大図書館で公開する予定である。

私は1996年に東京で開催された国際シンポジウムで初めて先生に会った。2004年と18年に渡り、ハーバード大で研究し縁が深まった。19年に同大で講演した際は先生に司会を務めていただいた。同年11月、先生が最後の訪日の際に、愛知大



晩年のエズラ・ボーゲル氏(左)と筆者(右)名古屋市内で

で講演していただいた。その講演録は『エズラ・ヴォーゲル最後の授業―永遠の隣人』と題して出版された。こうした恩の長い交流があり、ご遺族から蔵書の寄贈の提案を受けた。

蔵書は7割が英語で、残りは中国語と日本語。国際政治や日本の社会経済の専門書が中心で、中には先生の書き込みも見られる。中曽根康弘元首相や中国の江沢民元国家主席、韓国の金大中元大統領ら著名な政治家が署名した贈呈本も含まれ、先生の学識の背景に幅広い人脈があったことの証拠といえる。

蔵書は他にハーバード大での講義ノートやメモ、手紙など400点以上が寄贈された。ある資料には、1997年に当時の江沢民国家主席が訪米した際にハーバード大で講演したのは先生の尽力によることが記されている。米中の現実の世界にも少なからぬ影響力を持っていたことが分かった。

リ・しゅんり「中国・遼寧省生まれ。愛知大国際中国学研究センター所長、同大経済学部教授、米ハーバード大アジアセンター研究員

蔵書運搬中発見 遺稿の解読期待

蔵書を愛知大に運搬する作業の中で、米ボストン近郊の自宅の書庫から未公開の遺稿が偶然に発見された。改革開放初期の代表的な指導者で、元中国共産党総書記・胡耀邦(1915~1989年)の評価だった。蔵書の寄贈を記念して昨年7月、愛知大で「第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」を開催した際に、先生の夫人シャーロット・アイゲルズさんがビデオメッセージで明らかにした。

「愛知大が引き取る準備として」を掃除したところ、驚いたことに、ここにある書類の山を整理していたら、まさにこの棚に「胡耀邦」に関する彼の草稿を発見しました。それは2015年に書かれた草稿です。彼はそれをしばらく寝かせておいて、「日中関係史」という本を執筆していたのです。この本を書き終えたら「胡耀邦」の執筆を再開するつもりでした」

先生は改革開放の全容を解明するために、全力で評伝の執筆に取り組んでいたと聞いている。遺稿はご遺族が保管し具体的な内容は不明だが、今後米国内での解読作業に期待したい。

蔵書は、先生が60年間にわたる東アジア研究の知の遺産が凝縮されたものだ。日米中関係が混迷する中で、愛知大に創設する文庫が、激動の世界をひもとき知の拠点になることを願ってやまない。



ボーゲル夫人のビデオメッセージはQRコードから。



夕刊

発行所 中日新聞社
名古屋市中区三の丸一丁目6番1号
〒460-8511 電話 052(201)8811

2024年(令和6年)

1月19日(金)



第1回 エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム アジア研究の過去・現在・未来

2023.
7.1 (土)

開催日/ **7.1** (土)

時間/ 13時00分~17時00分 受付開始/ 12時30分

会場/ 愛知大学名古屋キャンパス
グローバルコンベンションホール

オンライン配信/ Zoomビデオウェビナー

参加無料
日英同時通訳

『Japan as No.1』の著者
Ezra・F・Vogel/傅高義
故 エズラ・ヴォーゲル 氏
ハーバード大学 名誉教授

主催/ 愛知大学国際中国学研究センター (ICCS)
共催/ 中日新聞社 ハーバード大学日米関係プログラム
ハーバード大学アジアセンター
後援/ 愛知大学教育研究支援財団 愛知大学同窓会

プログラム

第一部 開会式と記念講演 (13:00~14:20)

- ・開会の挨拶 川井伸一 (愛知大学理事長・学長)
- ・趣旨説明 李春利 (愛知大学国際中国学研究センター所長・大学院長)
- ・ヴォーゲル夫人のビデオメッセージとエズラ・ヴォーゲル博士の映像上映
- ・記念講演: クリスティーナ・L. デイビス
(ハーバード大学日米関係プログラム所長・ICCS顧問)

演 題: 「エズラ・ヴォーゲル博士の回想—アジア研究の継承と発展—」

第二部 パネルディスカッション (国際研究機構との合同プログラム) (14:20~17:00)

テーマ: 「アジア研究の過去・現在・未来」

パネリスト: クリスティーナ・L. デイビス (ハーバード大学日米関係プログラム所長)
ジェームズ・ロブソン (ハーバード大学アジアセンター所長)
リチャード・ダイク (ハーバード大学アジアセンター顧問)
今井耕介 (ハーバード大学教授)
趙全勝 (アメリカン大学教授)
益尾知佐子 (九州大学教授)

共同モデレーター: 李春利/佐藤元彦 (愛知大学国際研究機構長)

- ・パネリスト紹介 佐藤元彦
- ・冒頭発言
- ・一般討論&質疑応答
- ・総括
- ・閉会の挨拶 鈴木孝昌 (中日新聞社取締役)

<お問い合わせ> 愛知大学国際中国学研究センター(ICCS)事務室
〒453-8777 愛知県名古屋市中村区平池町4-60-6 TEL:052-564-6120
URL:<https://iccs.aichi-u.ac.jp> Email:iccs-event@m1.aichi-u.ac.jp





ICCS現代中国学ジャーナル, 第17巻, 第1号, 6月30日(2024)
 ICCS Journal of Modern Chinese Studies Vol.17, No.1, June 30, 2024

第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム「アジア研究の過去・現在・未来」特集【目次】

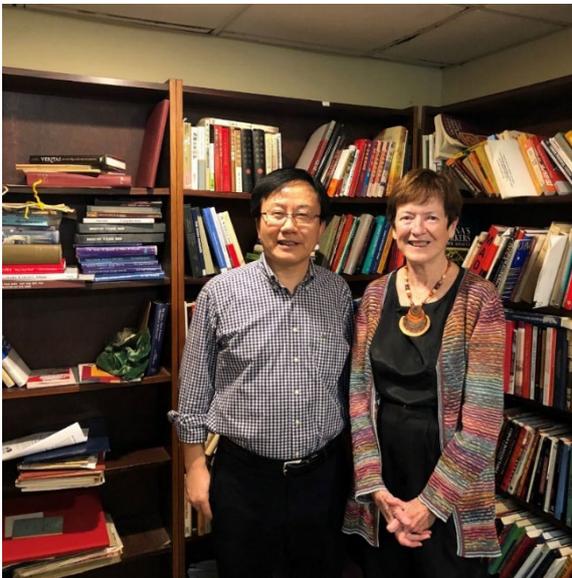
1	〈巻頭言〉 [特集] 第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム 「アジア研究の過去・現在・未来」に寄せて 李春利 ……	1
2	第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム「アジア研究の過去・現在・未来」全記録	12
3	The Ezra Vogel Library Comes to Aichi University: A Message from Charlotte Ikels (エズラ・ヴォーゲルの蔵書が愛知大学にやってきた —エズラ・ヴォーゲル夫人シャーロット・アイケルズさんのメッセージ— Charlotte Ikels (シャーロット・アイケルズ)	22
4	〈記念講演〉 エズラ・ヴォーゲル博士の回想—アジア研究の継承と発展— クリスティーナ・デイビス	28
5	第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム「アジア研究の過去・現在・未来」全記録 (II) 〈パネルディスカッション〉 アジア研究の過去・現在・未来 (パネリスト): リチャード・ダイク、今井耕介、趙全勝、益尾知佐子、 クリスティーナ・デイビス、ジェームズ・ロブソン	39
【依頼論文】		
6	Ezra Vogel's Library Legacy: An Analysis and Insights into Scholarly Interests and Contributions Based on Digital Humanities Di Wei, Chunli Li	83
【特別寄稿】		
7	The Study of Asia at Harvard University: Before and After Ezra Vogel James Robson	106
【依頼書評】		
8	変転中のアジア太平洋国際秩序を再考させる一冊 —『エズラ・ヴォーゲル 最後の授業—永遠の隣人—』を読んで— 陶徳民	146
9	李春利 (編著) 『不確実性の世界と現代中国』 木村公一朗	166

その特集の内容は目次のページに示されたとおりで、すなわち、第1回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」の全記録を、文字バージョンとしてまとめました。この特集には、合わせて9本のペーパーを収録しております。昨年は日英同時通訳を入れましたので、英語でのご発言も全部日本語に翻訳し、本人の確認・承諾を得てここに掲載させていただきました。

ちなみに、ICCSのホームページに、総合データベースという欄がありますので、そこには、この『ICCS 現代中国学ジャーナル』の過去15年分の論文が全部掲載されており、すべての資料はフリーダウンロードができます。今回の第1回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」の全記録は全部で約170ページになっており、記念講演やパネルディスカッションの内容はもとより、講演者のPPTや貴重な写真も多く掲載されております。

その中で特に強調しておきたいのは、今回の特集の第3項に、ヴォーゲル夫人のシャーロット・アイケルズ (Charlotte Ikels) 教授が寄せてくださったビデオメッセージがあり、その英語の原文および日本語の訳文が掲載されているということです。昨年の第1回ヴォーゲル記念フォーラムにご参加いただいた皆さまは、記憶しておられるかもしれませんが、奥様から見たご主人の研究方法やご自宅で長年開催されてきた「ヴォーゲル塾」の回想などが収録されており、とても素晴らしいビデオメッセージです。

ご存じのように、愛知大学はヴォーゲル夫人からヴォーゲル先生の蔵書約3,600点のご寄贈を受けました。その中で本は約3,100冊、そのほかに、雑誌や紙媒体の資料、およびハーバード大学での講義資料も約500点あります。それらが昨年末にアメリカのボストンから愛知大学名古屋校舎に届きました。今、名古屋図書館で整理・登録作業を進めている最中です。これらの資料の一部を、私はこれからご紹介したいと思います。



今から約2年前に、私はこれからご登壇いただく友人のリチャード・ダイク先生と一緒にハーバード大学の近くにあるヴォーゲル先生のご自宅を訪ね、ヴォーゲル先生の書斎と書庫を見学し、引き取る前のヴォーゲル蔵書のすべてを見てまいりました。これはその時、ご案内いただいたヴォーゲル夫人のシャーロット先生と一緒に撮った写真です。このシャーロット先生のビデオメッセージは、この後、再度放映させていただきます。約12分間で、日本語の字幕も全部入っており、第1回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」のハイライトの一つにもなった貴重な映像です。

それから、ここには特別寄稿というのがあり、“The Study of Asia at Harvard University: Before and After Ezra Vogel”と題して、ハーバード大学アジアセンター所長のジェームズ・ロブソン (James Robson) 教授が執筆されたものです。彼がお書きになったハーバード大

学 150 年間のアジア研究の歴史に関する大論文で、この特集に収録させていただきました。英文で約 40 ページ、中にはスライドと貴重な写真が約 50 枚入っております。

寄贈リストをベースにした英語論文の発表

それから、この後、衛娣 (Di Wei) 先生にご紹介いただく予定ですが、ICCS ではヴォーゲル夫人が寄贈してくださった約 3,600 点の蔵書リスト、すなわち、寄贈リストを作成いたしました。そこから読み解くヴォーゲル蔵書の特徴、先生の人的ネットワーク、蔵書の中にある数多くの書き込みなどについて、衛娣先生を中心に次の英語論文にまとめさせていただきました。私も名前を連ねさせていただきましたが、この論文も本特集に掲載されております。それを通じて、ヴォーゲル蔵書の概要や先生のアジア研究の特色がある程度判るのではないかと思います。

“Ezra Vogel's Library Legacy: An Analysis and Insights into Scholarly Interests and Contributions Based on Digital Humanities”

(Di Wei, Chunli Li, *ICCS Journal of Modern Chinese Studies*, Vol.17(1), 83-105, 2024)

特集の最後に、ICCS が特別に記念出版した 2 冊の本の書評も収録されております。ご覧になっている方もいらっしゃるかもしれませんが、『エズラ・ヴォーゲル 最後の授業—永遠の隣人—』(あるむ、2021 年) という本で、ヴォーゲル先生の愛知大学での講演録やその解説文などを中心にまとめられた一冊です。今から 3 年前、先生が亡くなられた次の年に出版されたものですが、一般市販されており、アマゾンでも入手できます。この本に関する書評は、関西大学の陶徳民名誉教授にご執筆の労を執っていただきました。約 20 ページに及ぶ重厚なものであり、書評というよりは、圧巻となった「エズラ・ヴォーゲル論」そのものだと思います。

最後の一本の書評は、私が編著した『不確実性の世界と現代中国』(日本評論社、2022 年) という本に対するものです。これは、ヴォーゲル先生のご令息のステイヴン・ヴォーゲル (Steven K. Vogel、カリフォルニア大学バークレー校教授) やお弟子さんのクリスティーナ・デイビス (Christina L. Davis、ハーバード大学教授) を含め、日米中の 19 人の研究者が共同で執筆した一冊です。アジア経済研究所の木村公一朗主任研究員のご執筆によるものです。

以上は、ICCS 電子ジャーナルの特集の主な内容であり、これはどこからでもアクセスできて、フリーダウンロードもできますので、皆さまのご参考になれば幸いです。

著名人の署名入りの謹呈本

それからヴォーゲル蔵書からサンプルとして数冊の本をご紹介したいと思います。ヴォーゲル先生の人望といいましょうか、著名人の署名入りの謹呈本が結構あります。例えば、なかには中曽根康弘元首相の本が 6 冊入っており、その中の 3~4 冊は署名入りで、英語

の本も入っています（写真省略）。ヴォーゲル先生と中曽根さんとの交流が長く、さきほどご紹介したヴォーゲル夫人のビデオメッセージの中にも二人の写真が入っています。このビデオは愛知大学の公式 YouTube チャンネルで一般公開されており、「愛知大学 エズラ・ヴォーゲル」と検索すればすぐ出てきます。

また、中国の江沢民元国家主席の署名入りの本は3冊入っており、「二〇〇六年十一月廿一日」と日付も書かれています。ヴォーゲル先生は、江沢民さんには何度も会っています。ご存じの方がいらっしゃるかもしれませんが、1997年、当時の国家主席である江沢民さんが、クリントン政権下のアメリカを正式訪問しました。エズラ・ヴォーゲル先生のご尽力により、江沢民さんはハーバード大学で講演しました。

ハーバード大学では「江沢民国家主席を歓迎するハーバード大学実行委員会」が組織され、その実行委員長にエズラ・ヴォーゲル先生が選ばれました（Chairman of the Harvard Committee to Welcome President Jiang Zemin）。ハーバード大学では江沢民さんはきれいな英語で講演していましたが、質疑応答も全部英語でこなしました。江沢民さんの英語講演は今でも YouTube で聞けるので、私も聞きました。また、2006年というのはたぶん江沢民さんが国家主席の任期を満了した後の時期だったと思います。ヴォーゲル先生はハーバード大学の学長と一緒に、北京の中南海を訪問し、江沢民さんに会いました。

そのほかに、ノーベル平和賞を受賞した韓国の金大中元大統領の謹呈本も数冊あり、本人の名刺とサイン両方が入っていました。皆さんご存じのように、金大中さんは最初に日本へ亡命し、その後は、ハーバード大学にも亡命して、ヴォーゲル先生とはずいぶん前から交流があったそうです。また、台湾の李登輝元総統の署名入りの本もありました。

また、石原慎太郎さんと盛田昭夫さんの『「NO」と言える日本』¹という有名な本もありました。石原さんの署名は殴り書きで読みづらかったのですが、「これ誰だろう？」と一瞬思っていました。よく見たら「ああ、あの石原さんか」と気づきました。そのほかにも、盛田昭夫さんや松下幸之助さんなど、日本の著名な経済人たちの寄贈書も結構あります。

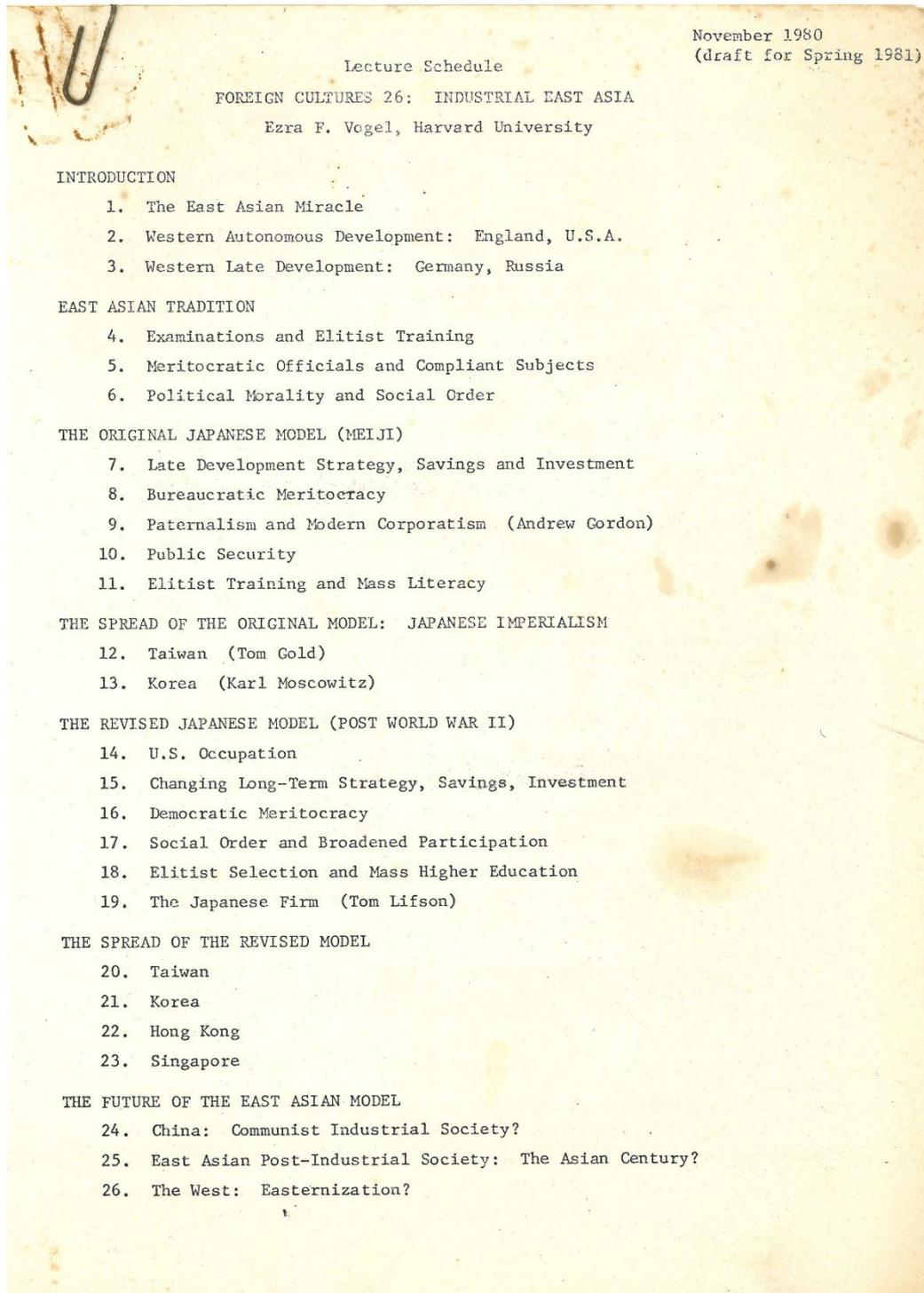
ハーバード大学での講義資料

さらに、寄贈された紙媒体の資料の中には、ハーバード大学での各種講義資料も入っていました。ヴォーゲル先生は、長年にわたりハーバード大学で全学向けのコアカリキュラムとして講義し続けた科目があり、その時の講義資料を、愛知大学に寄贈してくださいました。講義の科目名は“Foreign Culture 26: Industrial East Asia”となっており、日本語に訳せば、「外国文化 26 東アジアの工業化」ということになります。この授業は7つの単元に分かれており、全部で26回分になります。これらのレジュメにはいっぱい書き込みが入っています。

例えば、1980年のシラバスでは、「東アジアの伝統」を踏まえて、第3単元では、“The Original Japan Model (Meiji)”を取り上げられ、明治時代の日本モデルについて5回に分

¹ 石原慎太郎・盛田昭夫『「NO」と言える日本—新日米関係の方策』光文社、1989年。

けて講義されています。また、オリジナルな日本モデルの伝播と拡散という観点から、“The Spread of the Original Model: Japanese Imperialism” という単元では、日本帝国主義時代の台湾と韓国・朝鮮半島について講義されています。



Overall impressions

In Kume's diary, "Whenever our train arrived somewhere, we had scarcely set down our luggage when it was time to begin touring. By day we rushed around through soot blackened air exposed to offensive factory odors and the sounds of whirring wheels and hissing steam. We were covered with dust and grime. When we returned to our hotel in the evening, it was time for a banquet... We went to bed at midnight, but when we awakened the next morning the greeting committees from the factories had already arrived. And so it was that we constantly saw and heard new and wonderful things."

"When one goes through a museum, the order of a country's enlightenment reveals itself spontaneously to the eye and heart... one senses the hard work and toil of times past... As one sees the order or progress one feels obliged to work harder thereafter. Inspiration moves the heart. Ideas for learning spring up and cannot be controlled."

Trip instilled common sense of problem, could talk, evaluate,

optimism, excitement

文明開國

*got kind of
imperialistic
god's, spirit
like style*

1. Change from enriching country & strengthening military to enlightenment (bunmei kakoku)
7/25/1872 in NY, saw copies of Bible in Chinese, Kume's report, "In the people's reverence for God lies the root of their industriousness; in their good behavior lies the origin of their peace. In it also lies a nation's prosperity and strength."
Overall ranking of culture: England at top, then US & France, Germany coming up. Disappointed with Russia, but especially disappointed with China

2. Bismarck. *strong authoritarian leader, Prussian military commander* Tho countries cooperate and outwardly friendly, strong mutual suspicion. Military maneuverings of Europe are full of deception.

3. Mercantilism. Height of identification of nation with success of its economy. Develop industry and mining to get favorable balance of trade. Export, accumulate bullion, get merchant marine and colonies.
Some felt that too much money on defense can detract from economic growth
First priority on building up the economy

4. Needed raw energy of entrepreneur. Encourage merchants. Samurai spirit and energy of entrepreneur

和魂洋才 士魂商才

5. Planning and organization for growth
Tokugawa thought of economy as repetitive. New idea: progress, expansion
Required government leadership direction

Re shipbuilding, blueprints
National accounts, statistics
Businesses. Strict accounting or profits, business volumes, improvement of machinery

Kume: Jap more than a match for dexterity and quickness to understand
Westerners got ahead by energy, enterprise, planning, allocation of capital,

mastery of ways of working of gov't + economy, practical learning

*Urban
planning*

それから、第二次世界大戦後の日本モデルについて、第5単元では、“The Reversed the Japanese Model (Post World War II)” というテーマで、これも6回に分けてやっています。そして、第6単元 “The Spread of the Reversed Model” では、台湾、韓国、香港、シンガポールという東アジアへの戦後の日本モデルの伝播について説明されています。彼が執筆し

た『アジア四小龍』²は、これらの講義資料や各種ノートなどをベースにしてまとめられたのではないかと推測しております。

最後に、“The Future of the East Asian Model”の単位では、中国を取り上げられています。1980年時点での講義のレジュメなので、この時期における中国の経済発展はむしろこれからですが、ちゃんと視野の中に入っています。おそらく広東での現地調査を始めた時期なのではないかと思えます。

これらの資料の中で、一番古いのは1979年の講義資料が見つかりました。ちょうど『ジャパン・アズ・ナンバーワン』が出版された年です。ハーバード大学では、日本や東アジアについてこういうふうに教えられているのが判りました。ところで、ヴォーゲル先生の授業を受講した学生たちは今どこにいるのかを考えると、興味が湧きます。おそらくヴォーゲル先生の授業を聞いてアジアに関心を持つようになったり、あるいはコミットするようになったりしはじめたのではないかと想像しています。

実際のところ、この全学向けの講義のほかに、ハーバード大学ケネディスクール（ジョン・F・ケネディ行政大学院）やビジネススクール、社会学部での授業資料などもあります。受講者名簿には、アジア系学生の名前も多く見かけたりします。

また、これらのレジュメにはたまに漢字も出てきたりします。例えば、「文明開国」「和魂洋才」「士魂商才」など、ちゃんと日本語で書かれており、きれいな英語に訳されています。「よく知っているなあ」と、感心しながら読み漁っていました。

ここでは、戦後の日本モデルに関する講義の配布資料をサンプルとして取りあげております。まず、いわゆる「55年体制」の政治体制と経済体制がそれぞれどのように形成されたのかについて、細かく分けて講義されています。また、「護送船団方式」についても一部漢字で書かれています。私の専門分野は経済学ですけれども、東アジアの経済成長モデルは、よく「政府主導型経済発展」と言われています。ここには、日本の省庁の名前がずらりと並んでおり、また、系列（Keiretsu）・財閥（Zaibatsu）・経団連（Keidanren）などの言葉も日本語の発音のままで出てきているので、懐かしい言葉が見て取れます。

とりわけ、官僚制度に対してヴォーゲル先生は非常に強い関心持っておられ、官僚制度の話は繰り返し出てきており、その役割について強調されています。先生に直接お話を伺った時も、下村治とか宮崎勇とか、昔の経済官僚はスケールが大きいとおっしゃっていました。

それから、「55年体制」の政治体制がどのように確立されたのかについても、詳しく解説されています。左派・右派とか、「吉田学校」とか、ビスマルクのコメントも出てきます。とりわけ「吉田学校」（The Yoshida School）のところでは、岸信介や池田勇人、佐藤栄作、田中角栄など歴代の首相たちの名前がずらりと出てくるのです。これはかなり体系的な日本研究と言えます。このように、戦後の日本モデルの形成、およびそれが東アジア地域にどのように伝播されていったのかについて、かなり具体的に解説されています。

² Ezra F. Vogel, *The Four Little Dragons: The Spread of Industrialization in East Asia*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1991. 日本語訳：『アジア四小龍—いかにして今日を築いたか』、渡辺利夫訳、中公新書、1993年。

Foreign Cultures 26 Industrial East Asia Prof. Ezra F. Vogel
Lecture 3/20/00 **The 1955 economic structure: planning, convoy system, large companies**

The Consolidation of the 1955 Economic System

Economic Planning Agency established 1955, formed from Economic Stabilization Board
Indicative planning (like giant input-output chart), not socialist planning
Spring labor offensive (became stabilized, real labor fights ended, Kankeiren & unions)
Japan Productivity Center (established 1953, promoted "rationalization")
Keidanren under new president Ishizaka Taizo tilted toward big business, "general capital" + LDP

Community of what to do?

The Basic Concept: Changing Comparative Advantage (for exports of industrial goods)

Initial post-war advantage: skilled cheap labor, organization, determination
Use initial advantage to accumulate capital for heavy industry; technology, knowledge
Role of finance: high domestic savings channeled to priority basic sectors at low cost

*General capital + money policy
Budget, currency, exchange rate
selected →*

The "convoy system" convened by bureaucrats (MITI, Transport, Health & Welfare, Posts & Telecommunication, Construction, Agriculture/Forestry/Fishing, Education)

Worked with each sector to promote: "What is our common interest?" Helps provide focus, get information, build consensus (sometimes cartel), security for investment
Manage process of:

Get technology: scour world, "reverse engineer," research, pass to able firm. AIST
Location: best sites to key facilities (esp heavy industry), infrastructure
Liberalization: postpone import of key sectors to build strong local sector.

Keep pressure on companies to meet liberalization
Ex., of IBM where let in to process information, Merck of Bandai)

Build scale companies (upgrade requirements, aid to small number of companies)

Responsiveness of banks & local officials to ministerial consensus ("cow belling")
Evaluation: Enormous success during exciting "catch up" when needed capital, now rigid
Industries did well in foreign markets, especially in consumer goods. Sectors that didn't compete lagged though spread of competitiveness lifted bureaucracy, firms

Japanese Industrial Breakthroughs (Cf. Ford breakthrough: specialization, time-motion study)

Improved quality control and total quality control (Necessity to get brand recognition)
"Just in time system" (saves cost of warehousing, identifies problems)
Networking with stable suppliers (as opposed to bidding for specifications): quick on upswing, predictability, inside information. Sometimes slow cf. U.S.

Companies

Commitment to permanent employees more than to stockholders; flexibility from casuals
Keiretsu (Business networks)

Zaibatsu: revived but without holding company, loose organization) (Mitsui, Mitsubishi, Sumitomo) & **non-zaibatsu** (Ito Chu, Marubeni, Nishho Iwai)

Main company-supplier network, local transport companies

Independent companies, small business: Sony, Matsushita, Canon, Sega, Nintendo

Evaluation: Enormous success in catchup, industrial exports remain powerful

Works where competition strong
As diff. t
Cultures
Community: all Japanese, (unlabeled + co's)
companies

MacArthur

How become democratic?
Nature of democracy

3 yrs after Occupation till post-war system jelled.

How develop a new system where elected officials more powerful?

Foreign Cultures 26 Industrial East Asia Prof. Ezra F. Vogel
Lecture 3/17/99 **The 1955 Political Structure: LDP, opposition in the fields, bureaucracy**

Yoshida adopted
safe go da
Diplomat
retired 30 years
Watanabe
Bakayama
Swamp base
Dullas 50 years
big man

The Yoshida Legacy (1878-1967), prime minister 86 months from May 1946-Dec. 1954

The leading post-war political leader, kept dignity in defeat, defined postwar purpose
Professional diplomat who had retired 1938 after being Ambassador to England 1936-8
When Hatoyama Ichiro purged April 1946, became prime minister

Firmly ally with the leading super power, the United States, give up military
Accept security pact, provide bases in exchange for protection
Accept the world system that others erect and use to Japan's advantage

Rely on the bureaucracy for expertise

Recruit leading former bureaucrats as politicians

The Yoshida School: Kishi Nobusuke, Ikeda Hayato, Sato Eisaku, Fukuda Takeo, Ohira Masayoshi, Miyazawa Kiichi. Tanaka Kakuei ran political machine

Cooperate with big business: Nikkeiren, Keidanren, western capitalism

In short: support democracy that was pacifist, conservative, elitist, growth-oriented

Solidification into the "1955 system"

The Liberal Democratic Party (LDP), Socialist Party (SP) both formed 1955
Keidanren: Big business again supreme when Ishizaka Taizo became president, 1955
Labor peace with the "Spring Offensive" which began 1955
Economic Planning Agency formed 1955 (replacing Economic Stabilization Board)

The Cold War Political System (1955-1993)

1½ party system: LDP continuously in power, others continuously in the field

The Liberal Democratic Party (oriented to business, Western capitalist nations)

Former bureaucrats (elite, nationally-oriented) and pure politicians (local)
Lower House: Multiple districts and factions (Some funds directly to faction)
Faction leader had chance to become prime minister and he recruited talented people to run in the districts

③ Kanban ("the face"), Kaban (funds), jiban (local base)

Competition between the factions over personnel, not over policy

Progressive Parties: Socialist and Communist (oriented to labor, socialist countries)

Dilemma: supported by labor unions & when appealed beyond, lost labor support
"In the field": did not expect to win, didn't develop policies, but embarrassed LDP

Bureaucracy provided the expertise, wrote the laws the Diet passed, guided society

Keidanren represented big business and interfaced with politicians and bureaucracy

Economic Bureaucracy

Jurisdiction for various industries divided between MITI, Post and Telecommunications, Construction, Welfare, Finance, Agriculture, Transportation, Self Defense

Significance for business

Stability, predictability, and, when encountered problems, support
Even as early as 1955 began laying basis for Ikeda Income Doubling Plan of 1961

Remaining ambivalence about US troops, Security Alliance
and by political status

serious after 1952

social base
rural constituency
over representation
 Voters reject

weddings, benefits
local construction

さらに、台湾についてです。台湾もちゃんと「大陸反攻の基地」と書かれています。それから、蒋介石 (Chiang Kai-shek) 時代、蔣経国 (Chiang Ching-kuo) 時代、李登輝 (Lee Deng Hui) 時代に分けて各時代の特徴と政策について説明されています。また、書き込みがいっぱいあり、それらは次の授業に活かされていくのです。

Foreign Cultures 26 Industrial East Asia Prof. Ezra F. Vogel
4/12/99 Taiwan (changed structures from 1949, 1972, 1987)

*How 23M
Bikes, motorcycles, glitz
of Jap are desired, we are
buying cars, (iron & steel, new)*

*from Jap
Infrastructure, educ
Tech
discipline
Tropics*

*Jap colony, like K - Achieved success
Education, discipline unlike Philippines*

From Japanese Colonialism to Chinese Province to "Base for Retaking Mainland" (1945-9)
Speedy end of colonialism (cf. Indonesia, Malaysia, India, Vietnam, Philippines)
As province, reoriented toward China (1945) *head of China econ never devastated*
2/28/47 Incident: As more outsiders from mainland began to come in, local resistance
General Chen Yi asked local leaders to cooperate; when troops came slaughtered
thousands of local elite creating hatred of locals toward "mainlanders" *Chen Yi
eliminated but
didn't help
After Lee Deng Hui
was leading*
In 1949-1950 over a million Guomindang (GMD, same as Kuomintang, KMT) arrive

*Mainland
feels US
unfriendly
to Chiang in 1950*

*harvested in 1947
cigarette piddle*

Chiang Kai-shek (1949-1975): Hard Authoritarianism
Successor to Sun Yat-sen because had been commander of military academy (Whampoa)
Came as loser who failed to unify China or bring reform, but succeeded in Taiwan
Took more loyal followers to Taiwan, was smaller and more manageable *Whampoa
Not Song, Kong
+ 2nd industrial
Best technicians*
Required U.S. cooperation, and U.S. strengthened hand of technocrats
Leninist structure, army, secret police, military control, local submission
"Retaking mainland" to keep outsiders in control of "national government"
But 1972 Nixon visits China; China replaces Taiwan in United Nations *but local elections*
US recog'n 1979 - struggle for pride since empty until 87

*Still will
"pennet" ->
confront
with
Taiwan lobby
1958
US recog'n
1979
US recog'n 1979 - struggle for pride since empty until 87*

Chiang Ching-kuo (1975-Jan. 1988): Soft Authoritarianism and Taiwanization
Comprehensive preparation for succession: economics, secret police, youth league
"Prince clique" of close followers of younger generation moved on to power
Reduced role of military suppression, secret police - esp after 1984 secret police murder *secret police murder
New Year
1984
- SF*
Taiwanization in army, party, government but distance between government & business
Before death 1987, abolished martial law, allowed opposition, allowed visits to mainland
1987 also allows visits to relatives in mainland *along, distant
disputed*

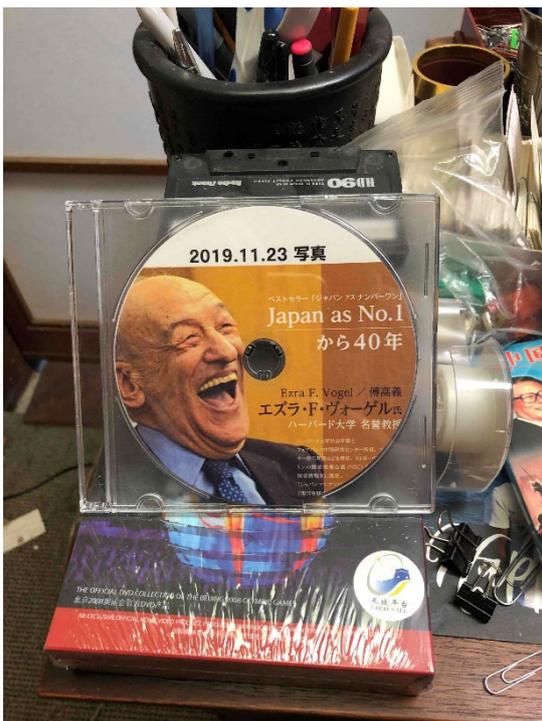
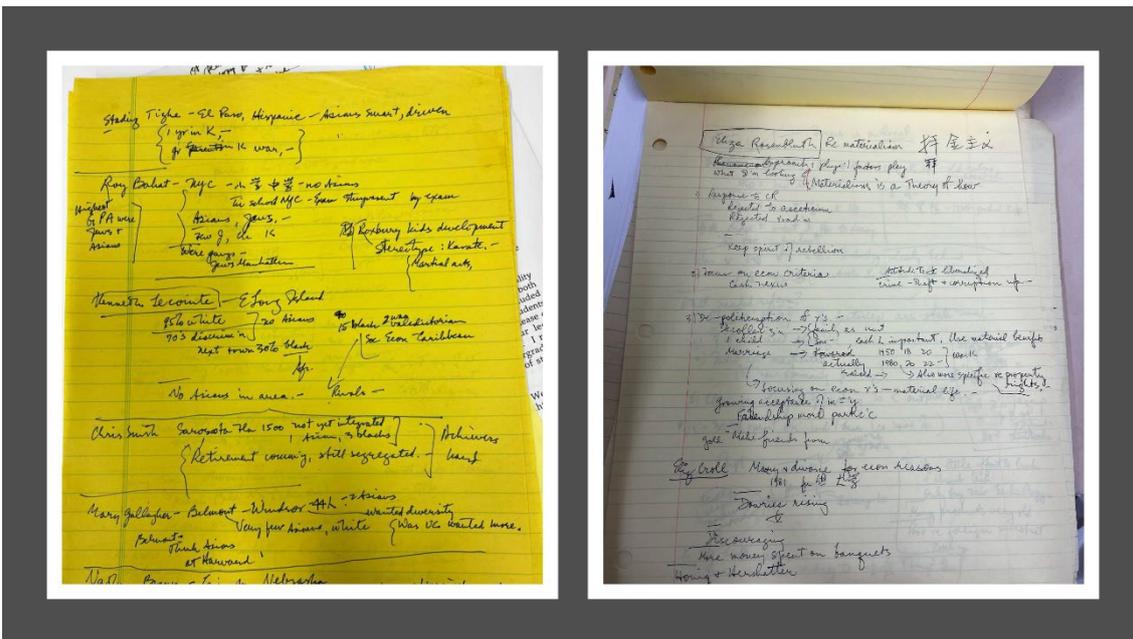
*in 1980s
Premier 1972
President 1978
Intellectual
Brought regime
with 1980s*

Lee Deng Hui (1988 on) Birth of Democracy
Was local, agricultural technocrat, trained at Kyoto University, Cornell University
Populism and anti-mainland feeling became strong *Re-examine 1988*
Opposition Party (Democratic Progressive Party, DPP) pushes localism
Attempt to build base for local independence, leading to mainland pressure *(he wants indep, so is)*
1959 (idea of democracy vs mainland) - went to Cornell 1964 to crisis
*New Taiwan people
electronics, textiles, footwear*
*Abolish mainland rep '92
"Country" '97*

Small Business and Financial Prudence
Originally business people were locals, government and Army officials were "mainlanders"
Former Japanese companies became government companies but were soon privatized
Opening to United States: Cold war and markets, technology, education
Opening to Japan: Older educated people spoke Japanese, kept business contacts (esp after 2/28)
Moved upscale following Japan as "flying goose;" "brain drain" became "brain bank"
After 1987 reorientation to mainland market with amazing speed *(dependence growing rapidly)*
Cf. Korea, government cautious financially, more financial reserves, less borrowing *Relations to
mainland*
Did better than South Korea after oil shock, 1997 financial crisis
Cf. Japan and South Korea, technology policy but not detailed industrial policy
Move from import substitution (1953-1959) to export promotion (1959 on),
industrial upgrading (1973 on), and vision of regional operations center (1994 on)

*Disappointment
- admin
- corruption
- business
- selfish*

*Education
nation*



最後に、寄贈資料の中には一部取材ノートも入っており、たまには漢字も見られ、「拝金主義」という漢字が出てきたりします。古いものとしては、1980年代初頭にヴォーゲル先生が広東省で行った大規模な現地実態調査の取材ノートの一部も見つかりました。

この写真は、2019年11月23日にヴォーゲル先生がこの愛知大学名古屋校舎でご講演いただいた時のものです。われわれが当時の写真やポスターなどをDVDに焼いて先生のご自宅にお送りしました。ヴォーゲル先生は翌年突然に急逝されましたので、ご自宅の書斎の机にはこのDVDがそのまま置かれています。これからご講演いただくリチャード・ダイク先生と私は、2年前にご自宅を訪ねた際に、この机の前で記念写真を撮ってまいりました。

「競争相手を必ずしも敵にする必要はない」

最後に、松下幸之助さんが作られた松下政経塾で、ヴォーゲル先生は2回ぐらい日本語で講演されました。先生は中国では中国語で、日本では日本語で取材や講演を行い、わりと徹底的に実行しておられました。寄贈された松下政経塾関連の書籍には、ハーバード大

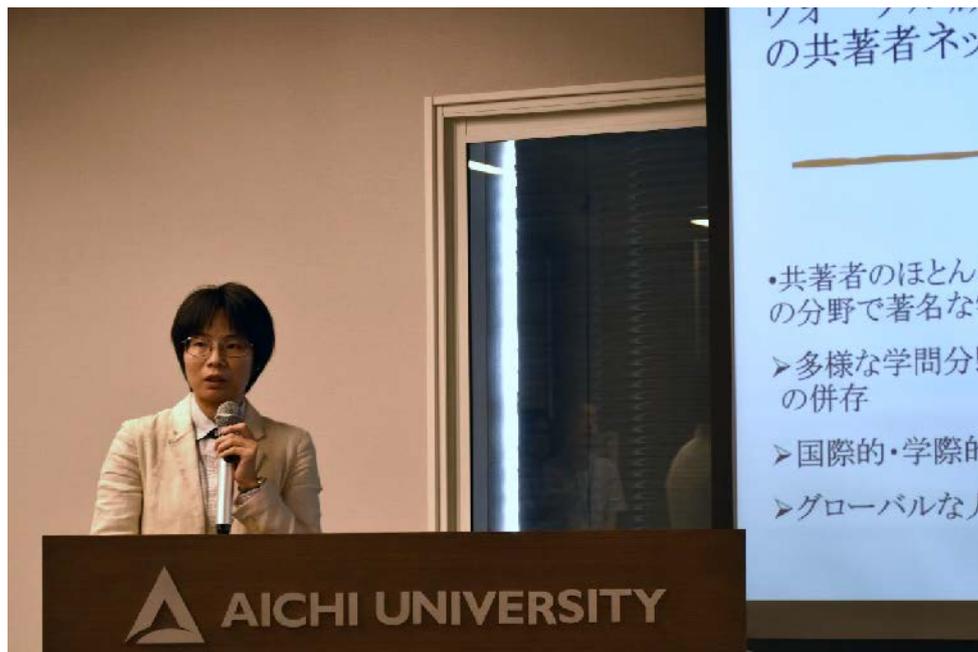
学からはジョン・ガルブレイス (John K. Galbraith)、エズラ・ヴォーゲル、ハーバード・ビジネススクールの学長であるジョン・マッカーサー (John H. McArthur) たちが登場しています。私にとって一番印象的だったのは、85歳の松下幸之助さんが私財70億円を投じて松下政経塾を作ったことです。松下幸之助さんの高い志には深く感銘いたしました。

1980年前後のことでしたので、当時はちょうど日米貿易摩擦の真最中でした。松下政経塾で講義された時のヴォーゲル先生の言葉が、私の印象に強く残っています。

彼が言うには、「日本はわれわれの競争相手ではありますが、競争相手を必ずしも敵にする必要はない」ということでした。約40年後の2019年に、ヴォーゲル先生が愛知大学の「中国公開講座」で講演された時も、また同じことをおっしゃっていました。つまり、「中国はわれわれの競争相手ではありますが、競争相手を必ずしも敵にする必要はないのです」。この言葉は、ICCSが出版した『エズラ・ヴォーゲル 最後の授業—永遠の隣人—』という本にも収録されております。

それでは、私の部分はこのくらいにして、あとは衛娣先生にお願いいたします。

衛娣 (周南公立大学講師・ICCS 客員研究員)



皆さま、こんにちは。私は昨年度まで愛知大学 ICCS 研究員として、エズラ・ヴォーゲル先生の蔵書が愛知大学に寄贈された際に、寄贈リストの作成を担当いたしました。今回は、寄贈リストのデータを基に李春利先生と共同で下記の論文を執筆いたしました。

エズラ・ヴォーゲル蔵書の種類 —多様なメディアとリソースをカバー

出典：“Ezra Vogel’s Library Legacy: An Analysis and Insights into Scholarly Interests and Contributions Based on Digital Humanities”
(Di Wei & Chunli Li=衛焯、李春利 英語論文)

(ヴォーゲル蔵書の遺産：
デジタル・ヒューマニティーズに基づく学
術的関心と貢献に関する分析)

【ICCS現代中国学ジャーナル】(ICCS
Journal of Modern Chinese Studies), 第
17巻, 第1号, 6月30日(2024), 83-105頁。

Type	Quantity
Book	3,170
Document (Unidentified)	200
Journal	158
Report	57
Thesis	37
Dictionary	23
Booklet	5
DVD	2
Photo Essay	1
Map	1
Total	3654

この論文を作成するにあたり、ヴォーゲル蔵書の寄贈リストを主要なデータ源として、そこからエズラ・ヴォーゲル先生の学術的な関心と、渉猟された幅広い学問領域を明らかにし、少しでも記録に留めておきたいと思い、努力してまいりました。

さきほど李先生が紹介したように、この英語論文は愛知大学 ICCS の機関誌『ICCS 現代中国学ジャーナル』第 17 巻第 1 号に掲載されております。これはオンラインの電子ジャーナルなので、どこからでもアクセスし、フリーダウンロードができます。ここでは、この論文に収録された代表的な図表を中心にご紹介させていただきたいと思っております。

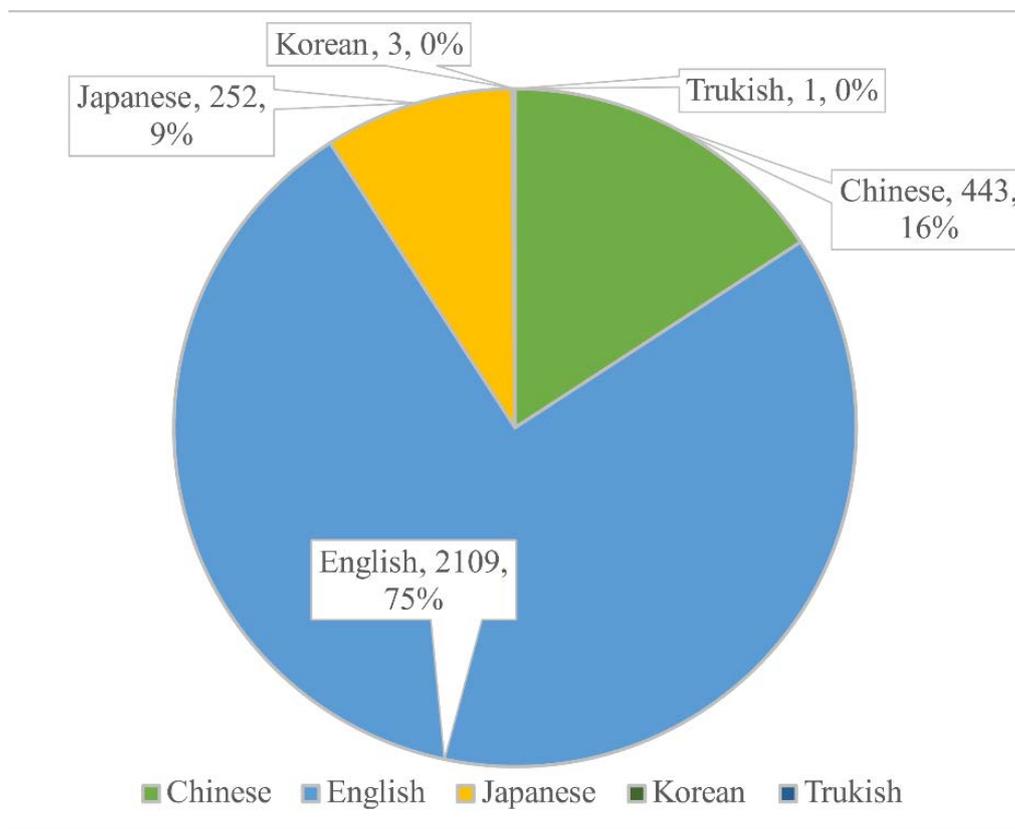
まずご紹介したいのは、エズラ・ヴォーゲル先生の蔵書の種類です。ご覧のように、蔵書の中には書籍だけではなく、ほかにもさまざまな種類の出版物が含まれております。つまり、ヴォーゲル先生は多様なメディアとリソースから各種情報やデータを収集していることが分かります。さきほど李先生が紹介した講義資料は、ここでは“Document”の中に分類されております。これらの資料はまだ整理している最中なので、今回の論文では書籍に焦点を絞って検討してまいりました。

さきほどご紹介したように、3,170 冊の書籍がありましたが、それに対してデータの正確性を保証するために、まずデータ・クリーニング (data cleaning) を行いました。最終的には、2,808 冊の書籍をリスト化し、「蔵書リスト」の表はその一部となっております。その中には、タイトル、著者、出版社、出版年、言語、分類 (カテゴリー) という 6 種類の情報が含まれております。

蔵書リスト (書籍のみ)

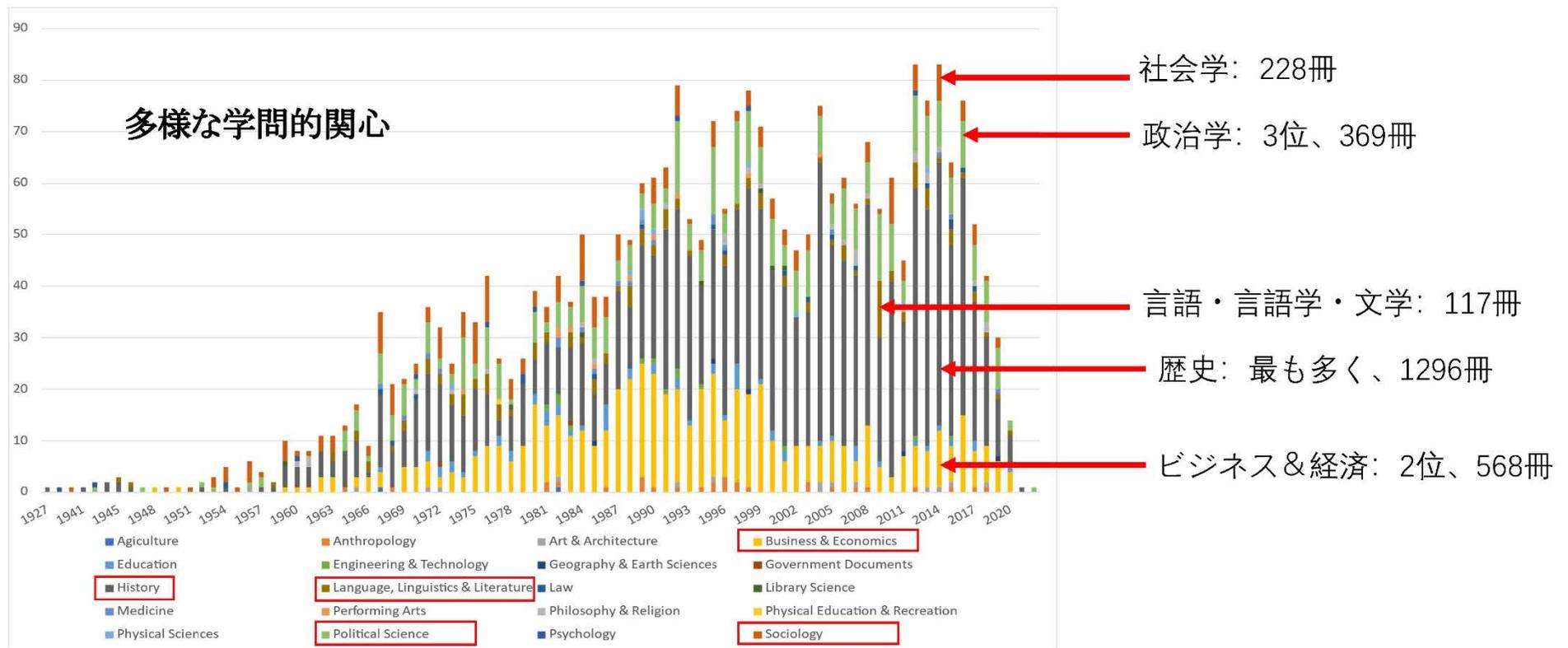
Title	Author					Publisher	Publication year	Language	Categorization
	Author	Co-Author1	Co-Author2	Co-Author3	Co-Author4				
The Two Faces of Management: An American Approach to Leadership in Business and Politics	Joseph L. Bower					Houghton Mifflin	1984	English	Business & Economics
Capitalism at risk	Joseph L. Bower	Herman B. Leonard	Lynn S. Paine			Harvard Business Review Press	2011	English	Business & Economics
Religion in Japanese History	Joseph Mitsuo Kitagawa					Columbia University Press	1991	English	History
Political Thought in Early Meiji Japan, 1868-1889	Joseph Pittau					Harvard University Press	1967	English	Political Science
China, An Interpretive History	Joseph Richmond Levenson	Franz Schurmann				University of California Press	1971	English	History
Why People Don't Trust Government	Joseph S. Nye Jr.	Philip Zelikow	David C. King			Harvard University Press	1997	English	Political Science
The Paradox of American Power: why the world's only superpower can't go it alone	Joseph S. Nye Jr.					Oxford University Press	2003	English	History
Soft Power: the means to success in world politics	Joseph S. Nye Jr.					PublicAffairs	2005	English	Political Science
Our Mother-Tempers	Joseph S. Nye Jr.					University of California Press	1989	English	Sociology
Is the American Century Over?	Joseph S. Nye Jr.					Polity Press	2015	English	History
Do Morals Matter?	Joseph S. Nye Jr.					Oxford University Press	2020	English	History
Bound To Lead	Joseph S. Nye Jr.					Basic Books	1990	English	History
1500 Modern Chinese Novels and Plays	Joseph Schye	Hsueh-Lin Su	Yen-Sheng Chao			Gregg Press	1966	English	Language, Linguistics & Literature
The Chinese Cultural Revolution as History	Joseph W. Eshcrick	Paul G. Pickowicz	Andrew G. Walder			Stanford University Press	2006	English	History
The Changing Political Attitudes of the Senior Bureaucrats in Hong Kong's Transition	Joseph Y. S. Cheng					Oxford University Press	1987	English	History
The Literature of Travel in the Japanese Rediscovery of China 1862-1945	Joshua A. Fogel					Stanford University Press	1996	English	History
The Cultural Dimensions of Sino-Japanese Relations: Essays on the Nineteenth and Twentieth Centuries	Joshua A. Fogel					Routledge	1995	English	Sociology

次の円グラフは、ヴォーゲル蔵書の言語的分布図です。ご覧のように、なかにはもちろん英語の本が一番多く、全体の75%を占めております。中国語と日本語は2番目と3番目となっており、それぞれ16%と9%を占めております。これは、ヴォーゲル先生が中国と日本の研究に強い関心を持つだけでなく、中国語と日本語を熟知していたことの現れでもあります。また、わずかですが、韓国語とトルコ語の本も含まれており、ヴォーゲル先生のご著書（主に鄧小平の本）がこれらの言葉に翻訳された、いわゆる訳書です。なお、この図のなかにはフランス語が出てきておりませんが、フランス語の雑誌や資料が蔵書全体のリストのなかに含まれております。ただ、書籍ではありませんので、今回の分析の対象外となっております。



そして、次の棒グラフは、ヴォーゲル蔵書のカテゴリー別時間推移の図です。この中では、歴史に関する書籍はどの時期においても最も多く、強い存在感を示しています。それを通じて、ヴォーゲル先生は歴史的な視点を重視されていたことが分かります。また、ほかにはビジネス&経済、政治学の書籍が2位と3位を占めており、ヴォーゲル先生はやはり経済と政治に強い関心を持っておられることが、改めて証明されました。ほかには社会学や言語学、文学などの本があり、多様な学問的関心を持っておられることが、この図である程度分かると思います。

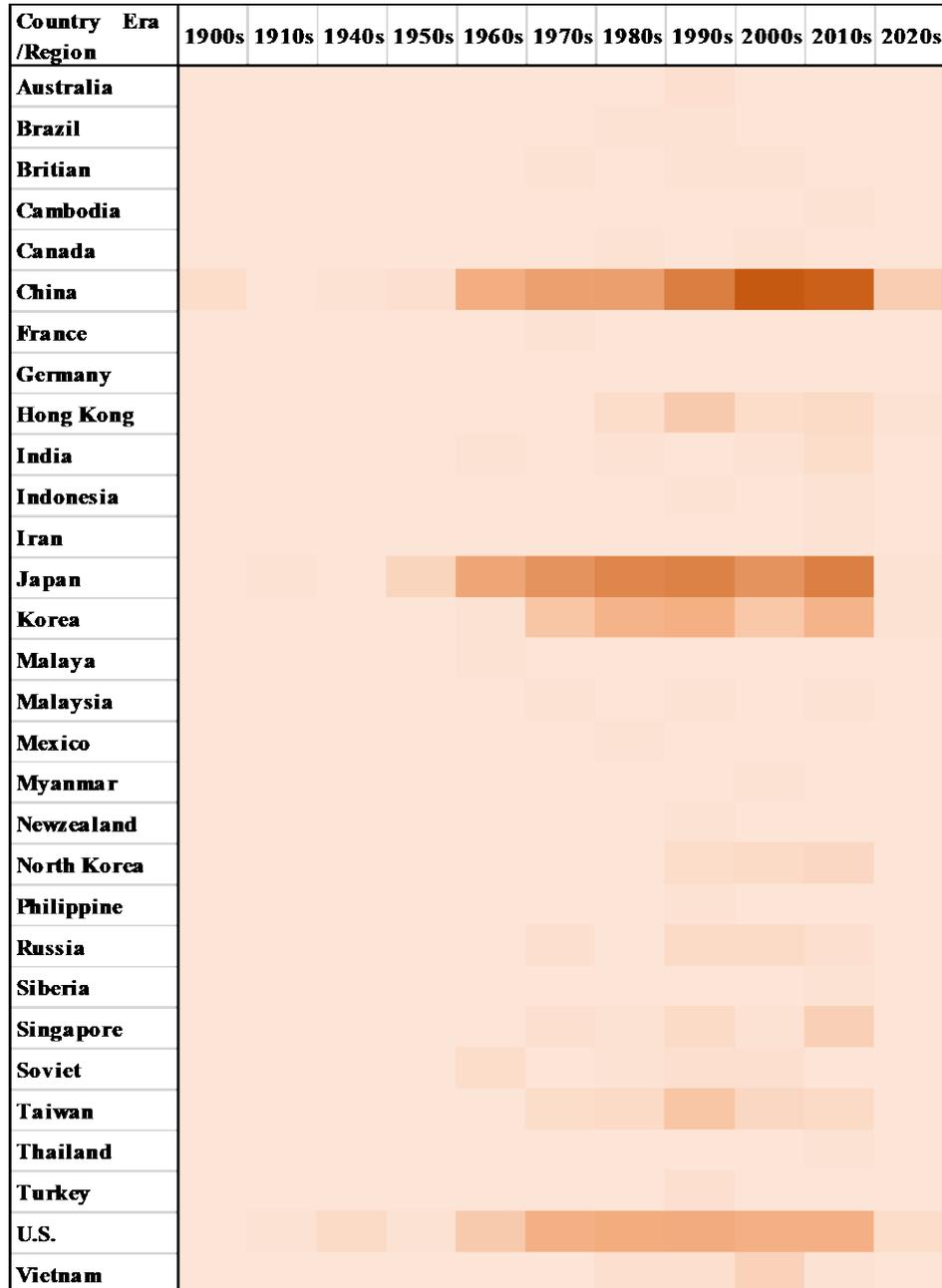
エズラ・ヴォーゲル蔵書のカテゴリー別時間的推移



次は、蔵書の作者頻度を示すワードクラウド (Word Cloud) の図です。例えば、タルコット・パーソンズ (Talcott Parsons) や、ジョン・キング・フェアバンク (John King Fairbank)、オーレリア・マルガン (Aurelia G. Mulgan) たちの著書は、ヴォーゲル先生が幅広い視野からアジア研究を行っていることを窺うことができます。また、鄧小平 (Deng Xiaoping) や陳雲 (Chen Yun) などの現代アジアの歴史に影響を与えた重要な政治・歴史的人物に対するヴォーゲル先生の強い関心が示されています。さらに、ジョセフ・ナイ (Joseph S. Nye Jr.) やエドウィン・O・ライシャワー (Edwin O. Reischauer)、ロナルド・ドーア (Ronald P. Dore) など、著名な学者の著書が多数入っており、これらはヴォーゲル先生の専門知識の深さを示しております。

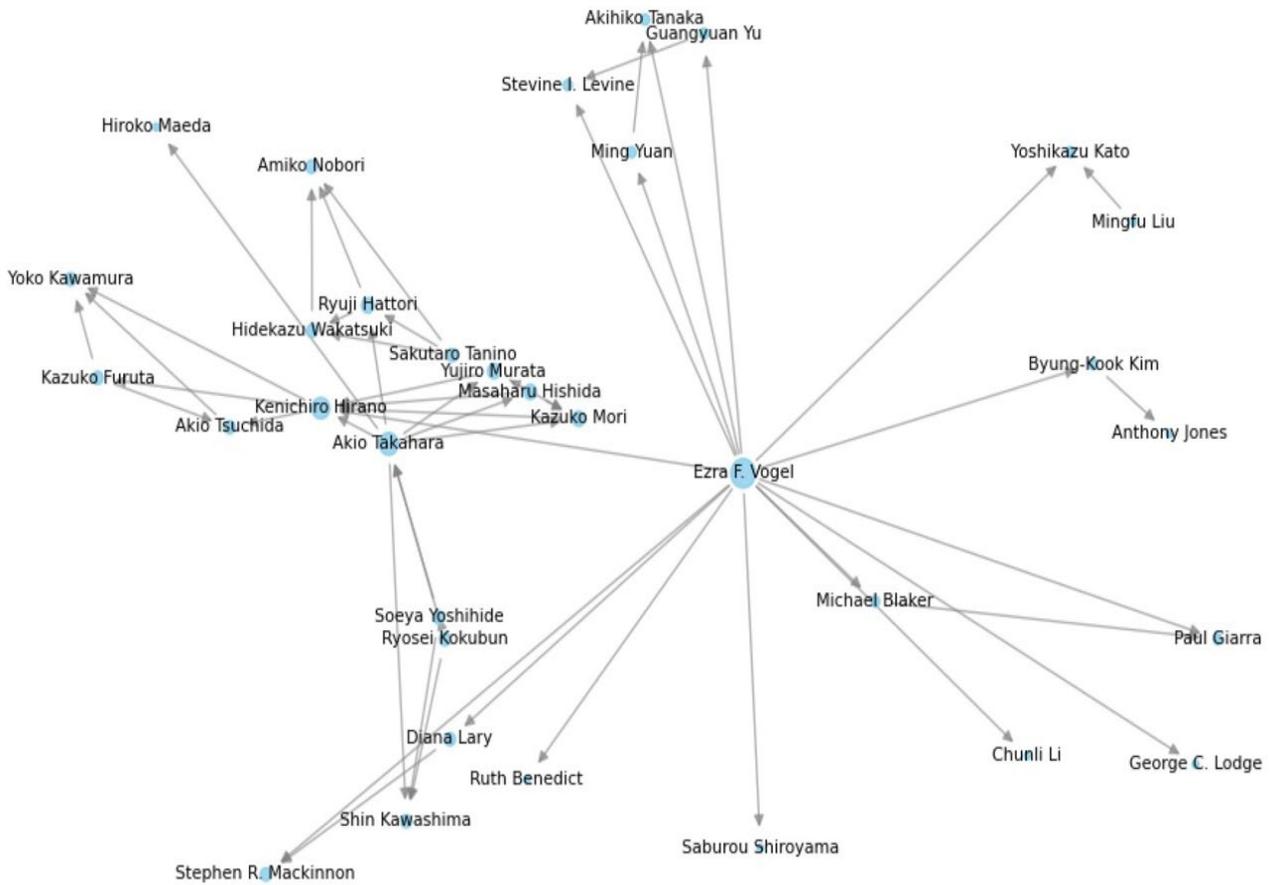


次のヒートマップ (heat map) は、ヴォーゲル蔵書における各国・地域に関する時期的分布の変化を表しております。この変化から、どの時期においても、中国と日本に強い関心を示していることが分かります。また、時期によってはほかのアジアの国々や地域（韓国、香港、台湾、シンガポールなど）へのヴォーゲル先生の関心が表われております。



最後の図は、ヴォーゲル蔵書の共著者ネットワークを示している図です。実際、この共著者の多くは、アジア研究の分野では非常に著名な学者たちです。共著者たちは多くの地域に居住しており、多様な学問領域を跨いでいることが分かります。これは、ヴォーゲル先生が研究を

行う際に国際的かつ学際的なアプローチを多用していることを物語っております。これは、ヴォーゲル先生が構築されたグローバルな人的ネットワークの底力が示されております。



以上、簡単な紹介でございますが、ご関心のある方は、ぜひ愛知大学『ICCS 現代中国学ジャーナル』に掲載されたオリジナルな論文をご参考ください。

田中：李先生、衛先生、どうもありがとうございました。

それではここで、さきほど李先生のお話にもございましたが、ヴォーゲル夫人よりいただいた、ビデオメッセージをご覧いただきたいと思います。12分程度ですが、ご覧ください。

シャーロット・アイケルズ教授（ヴォーゲル夫人）のビデオメッセージ：

The Ezra Vogel Library Comes to Aichi University A Message from Charlotte Ikels

「エズラ・ヴォーゲルの蔵書が愛知大学にやってきた
—シャーロット・アイケルズさんからのメッセージ—」

(ビデオメッセージの動画は愛知大学の公式 YouTube チャンネルにて一般公開されており、以下の URL もしくは QR コードから閲覧できる。)

<https://www.youtube.com/watch?v=e1GDJ80wfr0>



ただいまご覧いただいたビデオメッセージは、昨年、第1回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラムにお寄せいただいたメッセージを再上映したものです。

続きまして、慶応義塾大学名誉教授の國分良成先生より記念講演を賜ります。國分先生は、慶応義塾大学教授、防衛大学校長をご歴任され、申し上げるまでもなく、中国、東アジア研究の大家であります。本日は「歴史的視点から見た日米中関係の現在—ヴォーゲル先生に敬意を込めて—」というタイトルでご講演いただきます。それでは國分先生、よろしくお願いいたします。

記念講演

「歴史的視点から見た日米中関係の現在
—ヴォーゲル先生に敬意を込めて—」 (本誌参照)

國分良成

(慶應義塾大学名誉教授・前防衛大学校長)

田中：國分先生、大変貴重なご講演をいただき、どうもありがとうございました。國分先生にはのちほど、パネルディスカッションにもまたご登壇いただきます。

では続きまして、ハーバード大学アジアセンター顧問のリチャード・ダイク先生より基調講演を賜ります。ダイク先生は、ハーバード大学でヴォーゲル先生に師事され、Ph.D.を取得されました。ヴォーゲル先生の一番弟子のようなお方です。日本でのご経歴も長く、JETRO や日米友好基金の理事もご歴任されています。現在は、日本産業パートナーズ株式会社取締役を務めておられ、半導体産業の国際競争に関して深いご造詣をお持ちであります。本日は「半導体産業を巡る米中日競争のフロンティア」というタイトルでご講演いただきます。それでは、ダイク先生、よろしくお願いいたします。

基調講演

「半導体産業をめぐる米中日競争のフロンティア」 (本誌参照)

リチャード・ダイク

(Richard Dyck, ハーバード大学アジアセンター顧問)